

クラナーハ展

国立西洋美術館（東京・上野公園） 2016.10.15～2017.01.15



《ホロフェルネスの首を持つユディット》(部分)1530年頃/油彩・板（写真左）
《悪魔たちによって空中に運ばれる聖アントニウス》 1506年 木版(写真右)
16世紀における最もファンタスティックな版画作品の一つとされている。

「ルカス・クラナーハ（父）」（1472～1553）は、ドイツ・ルネサンス期を代表する画家・版画家で、領主ザクセン選帝侯「フリードリッヒ3世」に仕えながら、大型の工房を構えて息子の「ルカス・クラナーハ（子）」らと共同作業によって人の肖像画を主に描いている。また画伯は、同時代の宗教改革者「マルティン・ルター」と親交があったため、彼とその家族の肖像画も多く残している。

彼を一躍有名にしたのは、ヴィーナスやルクレティア、ユディットやサロメといった歴史＝物語上のヒロインたちの女性の裸体像であり、艶っぽくも醒めたムードで淫らでありながら軽妙なエロティシズムとともに作品を制作している。

更に宮廷芸術らしい優艶な女性像の描写でも比肩するものがないことでも知られている。

本展は本邦初の「クラナーハ展」で、画伯の芸術の全貌を当時の思想や文化、社会や政治などと併せて初期から晩年までの作品を読み解き、さらに彼の死後、近・現代におけるその影響にも迫り、影響を与えた後世の芸術家たちの作品を宗教改革から丁度500年後になる2016年に展示されるという企画である。